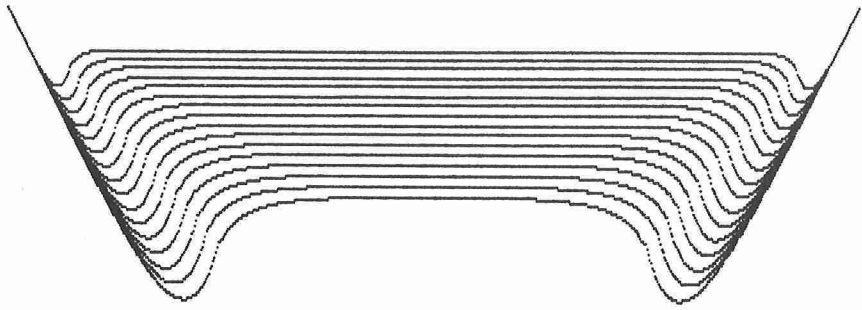


# 廣報

東京大学理学部



## 目次

モデル漫画	木村敏雄	2
好きなもの	植村泰忠	4
旅の印象	吉川虎雄	6
御挨拶	野田春彦	8
学部消息		9

## 表 紙 の 説 明

ゲームが数学や物理の面白い問題とつながる例は案外多いのである。例えば、佐藤幹夫氏のマヤゲーム（フェルミ粒子のエネルギーレベルの変化から発想された由）は  $n$  文字対称群の表現論における中山—Murnaghan の指標値の漸化式と密接に関係する（らしい!?!）。今次のようなゲーム（Schwenk-Game という）を考える。 $f$  を自然数の全体  $N$  上で定義された実数関数であって、次の性質をもつものとする：

1)  $f(n) \leq n$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) 2)  $f(1) \leq f(2) \leq \dots$ 。この时机上にいくつかの基石（例えば  $n = 1054$  個）を置き、甲、乙二人が次のルールでゲームをする。  
 (イ) 先手の甲は  $k$  個の基石を取去る。但し  $1 \leq k \leq n-1$  なる任意の自然数とする。  
 (ロ) 次の手番の乙は  $l$  個の石を取り去る。但し  $l$  は  $1 \leq l \leq f(k)$  なる任意の自然数とする。  
 (ハ) 以下、次の手番の甲は、直前に取り去られた個数  $l$  を用いて、 $m$  個の石を取り去る。但し  $m$  は  $1 \leq m \leq f(l)$  なる任意の自然数とする。  
 (ニ) 以下同様に続けて行き、最後に机上の基石をすべて取り去った者を勝ちとする。この時、後手必勝形となっている初期の石の個数のなす数列  $a_1, a_2, \dots$  はどのようなものか？ それは次の Schwenk の法則で与えられる： $a_1 = 1$ 、一般に、 $a_1, \dots, a_n$  が定まったとき、 $f(a_j) \geq a_n$  なる  $j$  の最小値 ( $1 \leq j \leq n$ ) を  $j = j(n)$  とおき、 $a_{n+1} = a_j + a_n$  で与えられる。例えば、“2倍取りゲーム”の場合、即ち  $f(x) = 2x$  なら、 $\{a_n\}$  は有名な Fibonacci 数列  $1, 2, 3, 5, 8, \dots$  (*i.e.*  $a_{n+1} = a_n + a_{n-1}$ ) となる。そこで、 $f$  がどのようなとき、 $\{a_n\}$  が一般 Fibonacci 型となるか？（すなわち一定の  $r$  と  $n_0$  とがあって  $n \geq n_0$  のとき  $a_{n+1} = a_n + a_{n-r}$ ）という問を考え、マイコンに実験させた。 $r(n) = n - j(n)$  として、点  $(n, r(n))$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) の描く“曲線”のグラフを種々の  $f$  について CRT 上に書かせて見た。すると  $f$  が一次式： $f(x) = \lambda x + \mu$  のときは、 $\lambda$  や  $\mu$  を様々に変えても、 $n \rightarrow \infty$  のとき  $r(n)$  が常数化するということがまさに CRT に描かれたのである。その実験途中のグラフ（対称的に2つ描いている）が表紙の図である。これに力を得て  $f(x) = (80x^8 + 800)^{\frac{1}{8}}$  なども一般 Fibonacci 型となることがわかった。そしてとうとう一般の法則： $\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{f(n)}{n}$  が存在すれば  $\{a_n\}$  が一般 Fibonacci 型となるという小発見に辿りついた。マイコンが教えてくれた法則といえよう。（尚、さっきの  $f(x) = (80x^8 + 800)^{\frac{1}{8}}$  の時は  $\{a_n\}$  は  $\{1, 2, 3, 5, 8, \dots\}$  となり Fibonacci 数列となる）。

(岩堀長慶：数学)

## モデル漫画

木村敏雄(地質)

最近、私の退官のもよおしに関連して、或る人が「木村地質学」という言葉を使った。それで、そんな言葉づかいはしないでほしいと申し入れた。私が「地質学」という名の教科書を書いたとして、それについての学生言葉としての「木村地質学」はあり得るかも知れない。しかしそれは、「先生といわれるほどの馬鹿でなし」に似て、ほめられた意味を持つものではない。またあるイデオロギーの教祖であったとしたら、そのような言葉があり得る。しかし、幸にして、私はそのような教祖ではない。むしろ逆に、本郷に来てからしばらくの間は、学外にあってイデオロギーを標榜すると称する人達の“地質学”に、どのように対応するかを苦慮したことがある。ただし私は、イデオロギーでそれに対応したことはないし、また今の私にとっては遠い昔話である。

地質学という学問においては、自然を如何に解明するかが問題である。地質学はいつまでたっても地質学であって、それが個性をもつことはない。私の研究について、固有名詞を冠し得るものがあるとすれば、木村式野外地質調査法といった文字通り泥臭いものであって、自然を解明するための技術とか、手法である。

地質構造を作る原因は地下の深いところにある。それは当然のことであるにもかかわらず、実際に地質構造や地質構造発達史を研究するとき、地表にあらわれたものばかりに注目して、平面的考察に終わってしまうことが多い。ルービックキューブで一面だけ色が揃ったとき、「できたできた」と喜んでしまうのに似ている。私は温度や圧力の違いに応じて、地下のやや深いところから浅いところにかけて、どのように地質構造の違いができる

かということの研究してきたし、その研究方法を応用して日本の地質構造発達史について従来とは相当に異なる見解を得ている。そのことから、私の研究法について「木村地質学」と呼ぶ人があったのであろう。しかし、ルービックキューブの全面を仕上げたという段階にはまだほど遠い。ただルービックキューブと違って、ほとんどでき上がったと思いながら、最後にどんでん返しを喰うことだけはなさそうだと思っている。

ルービックキューブの一面合わせといえば、最近地学の上ではやっている“モデル”と称するものにそのようなものが多い。そしてその非常に多くがプレートテクトニクス説に関連している。プレートテクトニクス説の中で、大洋プレートが大陸プレートの下にもぐり込むという考えには確かに立体性がある。しかし断面を考えるとときには断面だけの一面的思考になるし、構造帯の形式という問題になると、地表面だけについての一面的思考になる。このように書くと、虎の威を借りた人達はすぐに私はプレートテクトニクス説に反対しているのだという。そうではなくて、私はプレートテクトニクス説は正しいと信じているけれども、その説によって推論可能なほんの少しからはみ出した考えや、それに悪のりした考えが多すぎると云いたいのである。

モデルは、数値解析によって立証されたとき、またはそれを作製することによって、その作製に用いたデータ以外の多数の事実や現象をうまく説明できるとき、信頼性があると認め得る。またモデルのイラストはしばしば我々の想像力をわき立たせ、学問を推進させる。ただしそのイラストに価値があるのは、提唱された最初の段階のもので

ある。ここで私がプレートテクトニクス説に悪のりしたという“モデル”にはそのような意味での信頼性はないし、そのイラストに目新しさもない。

本州弧の西北隅にある飛騨帯が中国や朝鮮半島とかつて一体となって固定していて、本州弧の他の部分は、いくつかの“小陸塊”として赤道近くからつぎつぎに移動してきて寄せ集められたとする考えもまたキューブの一面合せの“モデル”である。それにもかかわらず、地下深くの地殻構造までもこのようにして出来たと考え、そのことがはっきりと証明されたとする人がいるのだからすさまじい。地下深くはいうまでもなく、地表近くについてもこの考えは誤っているのである。このように、“小陸塊”が赤道近くからつぎつぎに移動したと考えたのは、その“小陸塊”区の古地磁気がそこがかつて赤道近くに位置したことを示したからである。ところが一面合せが完成しそうだ喜んでいたらどんでん返しがあった。北シナ-朝鮮半島（中・朝陸地）は中部シベリアから遠く離れて、かつて赤道近くに位置していたことがわかったからである。本州弧の区域は長い間、中・朝陸地と共に、赤道近くにあったものである。私の研究室の者が、東アジアを固定させて、“日本列島内部の小陸塊”をつぎつぎに移動させる考えを“天動説”だといったが、まさしくその比喻の通りであった。飛騨帯を固定させるべきではなくて、本州弧区全体が中・朝陸地と共に移動していたのであって、“地動説”をとるべきものであった。

本州弧区域が、少なくともその主体が、中・朝陸地から遠く離れていなかった、あるいは少なくともそれと同一の生物区をなしていたことは、古生物の研究からよく知られていたことである。また、形成時代を異にする“小陸塊”の平面的なつながり合せで本州弧の形成が説明し得ないことは、構造地質学や層序学のこれまでの研究からわかり切っていたことだったのである。

構造発達史の過程の諸現象のすべてを、プレ-

トテクトニクス説によって数値解析可能なまでのモデルにまで作り上げることは、まだ誰もなし得ていない。大洋プレートのサブダクション、地下での熱の発生、マグマを形成する物理化学現象、マグマの上昇、それに伴う周辺地塊の変形などの諸現象がそこに包含される。その1つ1つがまだ完全にモデル化し切れないものがある。“小陸塊”寄せ集め説の誤りのもとは、特定のデータのみをプレートテクトニクス説にむりやりにあてはめるという、モデル作製法の誤りにある。その“モデル”は1つ1つの陸塊が大洋プレートと共に移動して固定大陸に付加するときの漫画の1コマ1コマとしてあらわされる。“小陸塊”の形成の過程や、1コマと次の1コマとのつながりが問われることはない。そこにカタストロフィズム（天変地異説）復活のきざしさえある。ネオカタストロフィズムと私が呼んでいるものである。このようなものはモデルと称するに値しない。そのイラストは「モデル漫画」というべきものであろう。

テレビが普及し、漫画本が大学生に好んで読まれる今日、言葉を使つての思考の退化は著しく、なげかわしいものがある。思考力の退化が、コピーの容易さが、複写した文献の中でのモデル漫画だけに目をさらすという風潮を作り、かつ助長する。学生にそのことを注意すると、「だって分りやすいですもの」という。「単純で分りやすいものは正しい」とする間違つた考えさえ生まれかけている。どうしたらそんな風潮の蔓延が防げるのかと、退官を前にして私は真剣に考えている。

## 好きなもの

植村泰忠(物理)

“好きなもの、苺・コーヒー・花・美人  
懐手して、宇宙見物”

この歌は、たしか寺田寅彦先生の作と記憶していますが、私の好きな一首です。これを拝借して、本郷生活約30年のあれこれを、思い出すまゝに記してみます。

苺では、まず、若かりし頃(今でも若々しく活躍ですが)のH先生自作になる、それは美事で大きなショートケーキが第一に思い出されます。拙宅で研究室のパーティを開いたときなど、よく自作のケーキを持参して工学部から特別に参加して下さいました。“Hさんのケーキ”とその日を心待ちしていた子供達はすでに成人し、やがて老夫婦二人の静かな日々が、私どもの家にも訪れることになるでしょう。そんな日には、小型のもので結構ですから、また美事な味を楽しませていただきたいものです。

コーヒーといえば、大学院の学生だった頃同室のY君に連れられて、本郷通り農学部先のあった“南米”によく通いました。建築の岸田日出刀先生や、音楽家の巖本眞理さんをとときどきおみかけしました。やせて眼つきの鋭い主人、肥えた気立てのよい小母さん、老夫婦二人で営むこれといって目立つところがない小さな店でしたが、“まがいもの”が多かった敗戦後間もない頃の本郷通りでは、数少ない“ほんもの”の味が楽しめました。“まがいもの”と“ほんもの”、“この二つのもの”の区別を、店の構えや従業員の数、或は看板の如何などではつけ難いことを、味(み)を

もって識ったことは、繁栄を誇る今日に、コーヒー店ならぬ学問研究の場でも変らぬ真実ではあるまいかと思い起こされます。

コーヒーを飲みながら、“彼女の脚の線が素晴らしいんだ”などとフィアンセのおのろけを聞かせてくれたY君、今は故人となったその脚線美の令夫人、ともに私の青春絵巻のなかで懐かしい人々です。

花は、上野の桜、湯島の梅、根津のつばじと本学周辺は名所にこと欠きませんが、キャンパスや小石川植物園の桜にはなかなか風情がありますし、日光分園の“みずばしょう”も忘れ難い眺めです。学部長の頃、お役目がらとときどきお訪ねした分園のKさん夫妻は、その後御健在でしょうか。分園の植物一本一本に深い愛情をよせながら案内して下さいた姿が眼に浮かびます。

何によらず、花の開くのをみるのは楽しく心地よいもので、毎年花の季節の訪れとともに博士論文を仕上げた人の晴ればれとした表情に接する楽しみもこれに似ています。大学の教員として、研究や教育、ときには管理運営に関する業務など、さまざまな仕事に当面して来た現在、在職の期間を通じて一番忘れ難いことは何かと問はれば、いくつかの特別な経験を挙げるよりは、これらの人とかつて研学の日々をともに過せた楽しみと、その一人一人の個性が開花し伸長するさまに目を見張るような想いを幾度か体験できた喜びとを挙げるのが、今の私の気持ちにもっともふさわしいように感じます。

戦後は、女性の職場進出が著しく、かつて職場

の花と眺められた時代から、今日では一層実質的な力となる段階に達しています。職場としての大学も、その例外ではありません。しかし、美人となれば女性の姿を眼に浮かべるのは男子の本性、最近のキャンパスを彩るレディー達はまことに美しい眺めです。“それでは君の忘れ難き人とは誰かね？”などと、意地悪い友人の質問を受けるのに先立って、“皆さんそれぞれに美しく忘れ難い方々で”と、角（かど）が立たず、角（つの）も出ない答えを用意して、私を八方“美人”の一人に数えていたゞきましよう。

さて、結びの下の句“懐手して宇宙見物”ですが、まことに悠々として雄大な結びではありませんまいか。科学者寅彦先生の達人としてのお心が偲ばれます。

寺田先生が物理学者として活躍された時代からみれば、現在の科学研究の実態は質の面でも量の面でも大きく変貌し、国の政策や、社会の動向が複雑にからんでいることなど、先生の時代には現れなかった種々の問題が提起されています。今日の大学が直面する問題もまた同様です。やゝ受け身の姿勢で、傍観的ともうけとられかねないこの下の句の境地は、もはや過去のもので、今日のものでないとする見解もあり得るでしょう。戦後の荒蕪から今日の繁榮に到る日々を、いわゆる猛烈社員の特攻精神で働き抜いてきた世代の者にとっては“懐手して宇宙見物”と結ぶよりは、たとえ歌の様（さま）にはならずとも“振り鉢巻、徹夜研究”とでも結ぶ方が、却ってピッタリするかも知れません。しかし、私は、今風にいえば、このギンギラギンの日々をさりげなく、懐手して宇宙見物の境地で受けとめることが、今日の、そして明日の研究者に求められているのだと思うのです。

懐手して不精をきめてむ怠け者は困った存在でしょうが、やれ研究費の調達だ、某々委員会だ、さらにはあちらこちらのコンファレンスの講演だ

と、忙しい雑用や、激しくしかも空しい先陣競争などの渦中に巻き込まれ勝ちの今日の研究者には、しばし懐手して思索と観想のときを持つことが、“ほんもの”の研究を産み出すためには欠かせぬ要素でありましょう。宇宙の扉を自らの手で開く“見物”の仕方は科学研究の正道で、懐手してでも自ら考え抜いてゆく過程なしには扉は容易に開かれますまい。同時に、他人の手で開かれた扉の向うの景観も、これを素直な眼で“見物”できる心を失うようでは、人間として悲しいことです。“懐手して宇宙見物”，この下の句の悠々として雄大な境地が示す、自由で高貴な精神とその品位ある香りが、今日の科学研究の状況のなかで一層想い起こされる所以であります。

自分のことを棚上げして、何だかお説教のような書き方をして恥かしく思います。説教調が出るようでは、まさに定年退官がふさわしい時期なのでしょう。理学部在職中を文字通り懐手してすぐした不精で怠け者の私が、ときには自然の神秘を見物させていたゞけたり、たまさかその一隅を自らのぞいたような気になったりできたこと、学部長などの責めを何とか無事に務められたことなど、これらはすべて、理学部の教官、職員そして学生の皆さんが、時に応じてお寄せ下さった力添えと、その寛容な友情の賜物です。この理学部の温かい居心地のよさこそ、長い間それに十分ひたらせていただいて来た私が、実は一番“好きなもの”であったのかとも思います。

数々の御厚意に対し心から感謝しつつ、おわかれの言葉を記しましょう。

“皆様、長い間ほんとうに有難うございました。”

## 旅 の 印 象

吉 川 虎 雄 (地理)

太平洋戦争が始まったばかりの昭和17年4月に東大に入学してから40年。その間、お茶の水女子大学に奉職した約2年半を除いて、研究室が理学部2号館2階の南東隅からほとんど離れることもなく過ぎていただいた。専攻分野の性格から旅行の機会に恵まれ、その間地球上のすべての大陸の片隅に足跡を残すことができた。内外の各地における旅行でえた印象は数多いが、中でもとりわけ鮮烈なまゝに残っているものが二つある。

思わぬきっかけから、スキーをはいたこともない私が第一次南極観測に参加することになり、約半年の間ゆるゆるの宗谷に身を託して、南極に赴いた。南極で行動した約40日の間は、基地設営という至上命令があるために、そのほとんどの時間を氷状観察や物資の輸送などについやし、本来の任務である地形調査に従事したのはわずかに3日であった。初めの2日間は、地質の立見現名誉教授とともに、昭和基地南東約25kmにある南極大陸の沿岸を調査した。こゝでは、海拔500mあまりの山地を呑まばかりに迫る大陸氷河の巨大さに、たゞ圧倒されるばかりであった。それよりも強い印象として残っているのは、3日目に歩いた西オングル島の風景からえたものである。最高点でも海拔50m足らずのこの島は、かつて大陸から広がっていた氷河の浸食をうけて、20m内外の起伏を示すなだらかな丘陵である。この年は残雪が比較的少なかったもので、片麻岩の赤茶けた岩肌が奇怪な模様を画きながら、波状に起伏していた。小さい島ではあるが、目立った地形がないために、うかうかしていると迷いかねない。ところどころ岩肌へばりついている地衣類の小さな群落の他には、生物は見られない。聞えるのはたゞ風の音ばかり

である。ふとこゝはまだ誰も人間の来たことがない土地であることを思い出した。一瞬、この単調ではあるが異様な景観を呈する土地が月の表面であるかのような錯覚に襲われた。冷静に考えればそうでないことはすぐ判断できるのであるが、たとえ一瞬とはいえ、このような錯覚をおこさせるほど、私には強烈で異様な印象であった。5年後再びこの地を訪れる機会をえたが、その時には、基地から多少離れてはいるものの、やはり人間が住みついた土地の一部であるという印象はぬぐい切れず、もう新鮮な感慨はわかかなかった。

もう一つの印象は、四国室戸岬でえたものである。私たちの研究分野では古くから有名なこの土地を私が初めて訪れたのは、1962年の秋のことである。当時は、安芸から長時間狭い悪路をバスにゆられて、ようやく室戸の町に到着する時代であった。室戸岬の少し西方に突き出た行当岬から海岸段丘を登りつめて、後ろの山地にさしかゝる辺りに、四国八十八ヶ所の一つ光明院金剛頂寺がある。このお寺の木立につままれた境内の一角から、室戸岬の全景が眺められる。それは、かなり急な小径を高さ200mばかり登ってきた者には、救われる思いがする見事な風景である。太平洋に突き出た室戸岬の岩礁には白波がくだけ、その後ろには緑の林におゝわれた高い海岸段丘がひろがり、その崖下へばりつくように漁村が点在している。それは確かに雄大な眺めであるが、しかしそれだけならば、日本の他の海岸でも時々見られる風景とあまり変わらない。この風景が私を強くひきつけたのは、海岸段丘が肉眼で見てもわかるほど室戸岬から西に向って低くなっていることである。それは地殻変動によって地表が傾むいたことを物語

確かな証拠に他ならない。それをこれほど見事に肉眼で一望のうちに収められるところは、それまでの旅ではついぞ見たことがなかった。また、大地震のたびに室戸岬が北に向って傾むきながら隆起した痕が、これほど見事に見られようとは予想もしないことであった。そして、また今にも土地が傾きそうな印象をうけた。その後、室戸岬が日本の地形に関心をもって訪れる外国の研究者を案内するのに格好の場所の一つになったことは、いうまでもない。今では金剛頂寺まで車で行けるようになったから、この風景をたやすく眺めることができる。また、室戸岬の後ろの山地にはスカイラインが開通して開発の手がのび、自然の風景はかなり損なわれるようになった。そして、急な小径をあえぎながら登りつめた後にえられたあの強烈な印象は、今ではもはや期待できないのではなからうか。これが、その後野外実習で学生諸君とともにこの地を訪れるたびに抱く実感である。

数多くの旅でえた印象の中で、この二つだけが私の中で風化しないまゝ鮮烈な印象として残っているのは、何故であろうか。思うに、それらのいずれもが何らかの形で私の研究に一つの転機をもたらしたからであろう。これからは研究室で処理する仕事が増えることと思うが、それでも地理を学ぶ者にとって、旅でえられるものの大切なことは、いつまでもかわらないであろう。これまでの私の旅は、そのほとんどすべてが研究に結びついたものであった。そして、眼前にひろがる風景を、ひととき研究から離れて、虚心に眺めることがいかに少なかったかを、今さらのように感じている。これから先も旅する機会は少ないと思うが、その時には、これまでとは違って、さまざまな風景をもっと広い角度から眺めるゆとりを持ちたいと思う。

ともあれ、今ふりかえって見ると、ずい分旅行する機会をえたものである。もちろん、すべての旅が楽しいばかりであったわけではない。むしろ、苦しい思いにさいなまれつゝ歩きつづけたことが

多かった。しかし、それも後になると、かえって忘れられない思い出である。こうした旅の機会を許していただき、それを通じて研究を進めて来られたことを、深く感謝したい。

最後に、理学部の一そうの御発展と皆様方の御活躍をお祈りいたします。



## 御 挨拶

野 田 春 彦 (生物化学)

いよいよ区切りをつけなければならないことになると、案外いろいろのことがあるものです。例年退官なさる方の御書きになることを何気なく読んでいましたが、これも自分で書くことになると難しいものです。

理学部の方に御挨拶と言っても、大半の方は顔はもちろんお名前も存じ上げません。

生物化学科が昭和33年に新設されたときには固有の建物はありませんでしたので、1号館、化学館、2号館に少しずつ部屋を借して頂いて、あちらこちら歩いた御蔭でわりあい多くの方の面識を得ました。それから例の騒ぎのときにはそれまで

全く御縁の無かった方と一緒に仕事をする機会もありました。

これらのことは全部10年以上の昔になってしまいました。以来本郷キャンパスでは一番辺鄙な隅にある3号館で平和に暮らせて頂きました。それで通勤の途中でお会いする方以外はほとんどの方と接触が無いという困ったような有難いような状況です。

この辺で夢を醒ます潮時のようです。先に何かあるのかわかりませんが、何れにしても失うものも無いことですから、新しい好奇心を持って次の段階へ進もうと思っています。どうぞよろしく。

毎月 1 日は

「省エネルギー」

の日です。

## 《学部消息》

### 教授会メモ

#### 1月20日(水)定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議題 (1) 前会議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 寄附の受入れについて  
(4) 人事委員会報告  
(5) 会計委員会報告  
(6) 教務委員会報告  
(7) その他
- (6) 昭和57年度受託研究員の受入れについて  
(7) 人事委員会報告  
(8) 教務委員会報告  
(9) 会計委員会報告  
(10) 学部長候補者の選出について  
(11) 評議員の改選について  
(12) 素粒子物理学国際協力施設長の選出について

#### 2月17日(水)定例教授会

理学部化学教室新館5階講堂

- 議題 (1) 前会議事録承認  
(2) 人事異動等報告  
(3) 理学部規則の一部改正について  
(4) 転学部について  
(5) 研究生の研究期間延長について
- (13) 中間子科学実験施設長の選出について  
(14) 地殻化学実験施設長の選出について  
(15) 人事委員及び会計委員の半数改選について  
(16) その他
- (次回予定：3月17日(水)午後1時30分より)

#### 理学部図書委員会を設置

さる10月定例教授会において、理学部図書委員会の設置が承認され、2月17日(水)第1回委員会が開催された。

この委員会は、本学部における図書・雑誌並びに資料の蒐集整理及び閲覧等の方針についての原案を作成し、教授会等に提出し、そこで承認され

委員長 岩堀長慶(数学)  
副委員長 佐佐木行美(化学)  
委員 榎本彦衛(情報科学)  
" 橋本英典(物理学)  
" 吉村宏和(天文学)  
" 斉藤正徳(地球物理学)

・本委員長及び副委員長は、全学の図書行政商議会委員及びその代理となる。

た事項の実務に関し、必要に応じ各図書室等に対し助言・援助及び指導等を行うことを主たる任務とすることを目的に、かねて懸案とされ設けられたものである。

なお、委員会の構成は次のとおりである。

委員 宮沢辰雄(生物化学)  
" 代谷次夫(動物学)  
" 笠原道弘(植物学)  
" 尾本恵市(人類学)  
" 鎮西清高(地質学, 兼鉱物学)  
" 鈴木秀夫(地理学)

・任期は原則として2年とする。(任期中の交替, 再任可)

## 人 事 異 動 報 告

所属	官職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
物 理	助 手	中 田 弘 章	56. 12. 31	辞 職	
物 理	助 手	植 松 恒 夫	57. 1. 1	転 任	京大助手基礎物理学研究所より
生 化	助 手	横 山 茂 之	57. 1. 1	採 用	
植物園	助 手	矢 原 徹 一	57. 1. 1	採 用	
数 学	講 師	加 藤 和 也	57. 1. 1	昇 任	理学部助手より
化 学	助教授	大 西 孝 治	57. 1. 1	昇 任	東工大教授へ
物 理	助教授	塚 田 捷	57. 1. 16	配置換	岡崎国立共同研究機構助教授分子化学研究所より
生 化	助教授	荒 田 洋 治	57. 1. 16	所属講座変更	理学部化学より
素粒子	助 手	駒 宮 幸 男	57. 1. 31	辞 職	
生 化	助 手	飯 哲 夫	57. 2. 1	採 用	
化 学	助 手	渡 辺 裕	57. 2. 8	復 職	
化 学	助 手	渡 辺 裕	57. 2. 16	昇 任	愛媛大学助教授へ
物 理	助教授	折 戸 周 治	57. 2. 1	配置換	理学部附属素粒子施設より
地 物	技 官	小 野 昇	56. 12. 31	辞 職	
物 理	技能員	根 岸 梅 春	56. 12. 31	辞 職	
物 理	事務官	佐々木 かおる	57. 1. 1	採 用	
天 文	用務員	大 木 ふみ江	57. 1. 1	採 用	
臨 海	事務官	白 井 幹 郎	57. 1. 1	昇 任	法学部法研総務掛長へ
事 務	事務官	高 橋 誠	57. 1. 1	配置換	理学部物理より
臨 海	事務室 主 任	大 塚 幸 男	57. 1. 1	昇 任	理学部庶務掛より

### 東京大学職員 of 永年勤続表彰

地球物理学科 小 野 昇 殿  
物理学科 根 岸 梅 春 殿

56. 12. 31 停年による退職に際し表彰され、記念品が贈られた。

## 外国人客員研究員報告

所属	受入れ教官	国籍	氏名	現職	研究員期間	備考
物理	有馬教授	大韓民国	李奎遠	全北大学校 電子計算所長	57. 2. 1 ) 57. 4. 30	大韓民国 全北大学校 学術財団
物理	鈴木教授	アメリカ合衆国	Humphrey J. Maris	ブラウン大学教授	57. 4. 1 ) 57. 5. 31	日本学術振興会 外国人招へい研究者
地質	久城教授	ソビエト連邦共和国	L.L. Perchuk	ソ連科学アカデミー 実験鉱物学研究所教授	57. 2. 1 ) 57. 5. 31	日本学術振興会 日ソ科学者交流事業
化学	朽津教授	アメリカ合衆国	H.L. Strauss	カルフォルニア大学教授	57. 3. 27 ) 57. 7. 1	日本学術振興会 外国人招へい研究者

## 海外渡航者

( 1 月 )

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
数学	助手	楠岡成雄	インド	1. 2 ~ 1. 11	確率場の理論と応用に関する研究集会出席のため
情報	教授	国井利泰	アメリカ合衆国	1. 5 ~ 1. 11	第15回システム科学ハワイ国際会議出席及び情報科学に関する研究連絡のため
地質	助教授	中村保夫	フランス	1. 8 ~ 7. 7	造山帯の超苦鉄質岩, 緑色岩類の研究のため
数学	助教授	岡部靖憲	インド	1. 2 ~ 1. 11	確率場の理論と応用に関する I F I P コンフェランス出席のため
人類	教授	尾本恵市	フィリピン	1. 11 ~ 3. 2	ネグリト族の集団遺伝学的調査(第3次)実施のため
素粒子	助手	佐藤朝男	ドイツ連邦共和国	1. 23 ~ 2. 22	電子・陽電子衝突実験のため
情報	教授	国井利泰	アメリカ合衆国	1. 18 ~ 1. 25	第1回医療適用に関する広領域コンピュータ画像情報システム国際会議及びコンピュータ通信技術研修会出席のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
情報	助手	山口和紀	アメリカ合衆国	1. 18 ~ 1. 25	第1回医療適用に関する広領域コンピュータ画像情報システム国際会議及びコンピュータ通信技術研修会出席のため
物理	教授	有馬朗人	バングラデシュ, シンガポール	1. 19 ~ 1. 27	「発展における物理の役割」シンポジウム出席及び原子核物理に関する研究連絡のため
物理	助手	新田 勅	インド	1. 31 ~ 3. 31	夏季モンスーン観測実験期間中の熱と水蒸気収支の研究実施のため

(2 月)

物理	助手	千葉順成	アメリカ合衆国	2. 1 ~ 58, 1. 31	電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験のため
物理	助教授	折戸周治	ドイツ連邦共和国	2. 8 ~ 2. 23	国際協同実験—電子・陽電子衝突実験のため
物理	助手	渡辺靖志	ドイツ連邦共和国	2. 14 ~ 3. 6	国際協同実験—電子・陽電子衝突実験のため
地理	助教授	永田 豊	フランス, ユーゴスラビア	2. 23 ~ 3. 9	世界海洋循環実験計画選定研究班第2回会議並びに気候変動と海洋に関する委員会第3回会議出席のため
植物	講師	笠原道弘	アメリカ合衆国, デンマーク	2. 23 ~ 8. 31	膜生化学に関する共同研究及び生体膜シンポジウム出席のため
数学	助手	楠岡成雄	アメリカ合衆国	2. 20 ~ 4. 10	確率論に関する研究のため
化学	教授	朽津耕三	連合王国, アメリカ合衆国	2. 21 ~ 3. 14	準安定希ガス原子と気相及び凝縮相分子間のエネルギー移動過程に関する共同研究実施並びに構造化学に関する研究連絡のため

\*\*\*\*\*  
 ◎泥棒がねらっている (盗難注意) ！  
 \*\*\*\*\*

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

\*\*\*\*\*

## 編 集 後 記

年度の最後の理学部広報を、停年御退官される  
四教授の文章で飾ることができ感謝の極みです。  
次号から、編集責任者が新しくなり、編集員の

一部交代も予定されています。この一年間、広報  
発行に当たり、各方面の御協力をいただきました。  
御礼申し上げます。 (飲高)

あなたです！

火事を出すのも

防ぐのも

---

編集：

飯 高	茂 (数学)	内線	4053
矢 崎	紘 一 (物理)		4123
小 平	桂 一 (天文)		4258
露 木	孝 彦 (化学)		4357
尾 本	恵 市 (人類)		4482

---